

Title	大逆事件における「近代」と「前近代」：浜畑栄造「大石誠之助小伝」によせて
Sub Title	The problem of 'modernism' and 'premodernism' in the high treason accident : an essay on "The life of Seinosuke Oishi" by Eizo Hamahata
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.5 (1973. 5) ,p.330(82)- 335(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19730501-0082
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19730501-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大逆事件における「近代」と「前近代」

—浜畑栄造「大石誠之助小伝」によせて—

飯 田 鼎

(1)

明治維新以後の日本の歴史のなかで、われわれは、その流れを変えるほどの画期的な転機として、つぎの3つの事件をあげることができるのではなからうか。そのひとつは、1910年から11年にかけての大逆事件であり、つぎに1923年の関東大震災、そして1945年の敗戦である。明治の終り、日本資本主義が、独占段階に入ろうとしていたまさにその時期におこった大逆事件は、日本の朝野を震撼し、その波紋は、国際的な抗議行動が日本政府にたいしてむけられたほど深刻なものであった。

関東大震災は、それ自体としては、未曾有の天変地異であり、天災にほかならなかつたとはいえ、この混乱を利用して、アナキスト大杉栄が、その妻、伊藤野枝および甥、橘宗一とともに甘粕憲兵大尉によって虐殺され、また平沢計七等ら葛南の労働者も、官憲によって虐殺され、震災以後、革命的な社会主義運動は大きな打撃をうけ、日本の政治が、急速に反動化し、やがて、ファシズムの波に吞まれていった事実をみれば、大逆事件と同じく、現代史における大きな転換点であったといっても過言ではないであろう。1945年8月15日の意味についてはいまさら語るまでもない。

大逆事件と大杉事件には、いくつかの共通した面がみられる。何よりもそれらは、革命的なアナキストにたいするきわめて徹底した弾圧であることと、この事件の経過が公正な裁判の原則を無視して強引にすすめられ、あるいは暗から暗へ葬られるという、近代史に類例をみないきわめて陰惨な形でおすすめられ、日本の社会および政治状況の前近代性が露呈されたことである。そして大逆事件と大杉事件および8月15日

に共通する問題は、タブーとしての天皇制が、いかに深く、国民思想の内部に深く根をおろしていたかということであらためて意識せしめたことのうちにある。このことは、8月15日以後、国民が天皇制の呪縛から解放され、天皇が、「神」としての地位から追放されることによって、精神的にははじめて近代がはじまったという印象を、身をもって体験した者の誰もが実感するところであろう。

日本の支配者たちは、政治権力を掌握する場合に、みずからのうちに権威を確立することができなかつた。自己の権力掌握を正当化するために、絶えず、自己の内面からわき上る精神的権威に依拠することなしに、外部の象徴的存在によって、自己の存在意義を確証しようとしたのである。これは、キリスト教文明の伝統のなかに生きて、絶対者としての神の存在を強烈に意識しつつ近代的自我の確立をなすとげ、自己の内面的権威に従って行動するヨーロッパ人とは、全く相異なる精神的態度であった。まさに天皇制こそ、そうした日本人における権威のあり方を、近代日本の黎明期からいまに至るまでわれわれに指し示す証拠物件である。鎌倉・足利幕府は、皇室と決定的に敵対し、これを滅ぼすことのできる充分な実力を有しながらも、これにとって代ることは敢えてしなかつたし、その後のいかなる封建的権力者も、ほとんど同様な発想のもとに行動し、天皇制は一種の「タブー」として、封建的諸勢力の均衡の上に象徴として、存在しつづけたのである。徳川幕藩体制の確立のもとで、タブーとしての天皇制の権威は、その影をうすくしたのであるが、明治維新を契機として復活し、明治10年代の自由民権運動の危機をのり超えることによって、立憲君主制の名の下に、その幻影は、次第に国民の思想形成の背骨としての地位をあたえられていった。明治30年代、日清

大逆事件における「近代」と「前近代」

戦争に勝利をしめた日本が、おそまきながら産業革命を推進し、アジアにおける唯一の新興資本主義国として、ヨーロッパ諸国の覇権に対抗するために、一方において、中国大陸への進出、他方において国内世論の統一を急務としていた時期は、また、労働組合運動や平民社を主体とする社会主義運動の勃興期であり、こうした内外の緊迫した要請に応ずるためにも、イデオロギーとしての天皇制を、国民思想の奥深く定着させることが急務であった。そして日露戦争を中心として、はげしい「反戦平和」運動を展開した平民社の運動が崩壊したあと、国民思想のなかに根強く浸みとおろつた天皇制イデオロギーは、その凱歌を高らかに奏するかみえた。だが、ここに重大な挑戦をうけることとなった。それは大逆事件である。

1月24日は、大逆事件の死刑囚が処刑された日である(但し、菅野スガは、翌25日に処刑された)。「大逆事件の真実を明らかにする会」は、この日に記念の集会を催す。だがこの日をいまに記念することの意味は、たんに、犠牲となった人々の無実を明らかにすることや、追悼するにとどまらず、天皇制権力のなかにひそむその本質、その前近代性を身をもって体験し、その権威に挑戦した人々の命日であることを、いま、この事件についての克明な研究が盛んになりつつある現在、認識することが必要ではなからうか。

(2)

大逆事件の犠牲者、24名のうち、幸徳秋水以下12名の者が死刑、残りの半数が死一等を減じられて終身刑となった。これらの群像は、人間としてみても、興味深いものがあるが、とりわけ、死刑にされた12名のなかには、まことに多彩な魅力ある個性の人々が多い。アナキズム運動の理論的指導者であった幸徳秋水はもちろん、その愛人、菅野スガ、大阪平民新聞を主宰し、園芸家としても知られた森近運平、入獄記念「無政府共産」と題するパンフレットを書き、同志に配布して深刻な衝撃を与えた箱根太平台、林泉寺の住職、内山愚堂、機械工として各地を遍歴し、爆弾の製法を研究し実験し、大逆事件の発端をつくった宮下太吉、特異な風貌と胆力をもって知られた古河力作、過激な思想と行動に燃えた美青年、新村忠雄、そして、自由民権運動に参加し、その左派としての立場から、次第に社会主義に移行し、幸徳派に接近し、彼らを官憲に売ったといわれる奥宮健之など、一人ひとりについて述べ

ればまことにつきることがない。だがそのなかで特異な地位をしめるのは、紀伊、新宮の医師大石誠之助である。

この大石誠之助については、彼が明治のアナーキストのうちで、もっとも有名なひとりであったにもかかわらず、最近まで、その研究があらわれなかった。いまここに、浜畑榮造氏のきわめて詳細な伝記、「大石誠之助小伝」をえて、この個性的な社会主義者の全貌が明らかにされたことは、学界にたいする、大きな貢献である。さらにまた幸徳秋水全集が完結し、とくにその別巻第1においては、幸徳にゆかりのある人々および大逆事件に何らかの形で関係した人々によるすぐれた追憶の集成があり、感銘をあたえる。だがもっとも興味深いのは、幸徳を中心として、その周辺のアナーキストおよび革命家の群像の珍しい写真を蒐集し、幸徳秋水の誕生、少年時代から大逆事件に至るまで、写真による詳細な説明を試みている「大逆事件アルバム——幸徳秋水とその周辺」である。このアルバムによって、われわれは、大逆事件の真相を、明治史の一断面として理解することができる。

しかし、いまここでこれらの研究のそれぞれについて論評するのではなく、この事件の背後にかくされた人間関係、権力機構との関係、およびとりわけこれらの群像の行動のうちにあらわれた「近代および前近代」についてふれてみたいと思う。

大逆事件に連座した人々のなかで興味深い事実は、彼らの職業の多様さである。高木顕明と内山愚堂は僧侶であることとならんで、大石誠之助が、実に医者であることが注目をひく。他の多くの犠牲者が、生活が不安定であるのに比べれば、僧侶や医師は、それほど生活に苦しんでいたとは考えられない。それどころか、大石誠之助は、アメリカ帰りのドクターであり、新宮における新知識として、その門前、市をなす名医としてひろく近郷近在に名を知られた人物であった。彼が何故に、この大逆事件にまきこまれ、しかも極刑に処せられたのであろうか。浜畑氏の克明な研究は、その謎を、彼の生い立ち、環境、人柄および交友関係を、きわめて綿密に、また実証的に調査することによって、この人物の悲劇性ともいうべきものの本質に迫ろうとしている。

幸徳秋水以下、24名の群像は、日本のアナーキスト運動において、ひとしい重要さをしめていたのではないことは、いうまでもない。思想を通じて、これらの同志は互いに結びついていたとはいえ、その人脈を連

っていくと、アナキスト運動および大逆事件におけるそれぞれの役割が明らかになってくる。そして大石誠之助は、こうした大逆事件の人脈のいわば中核的な存在であったことを、この浜畑氏の労作は、われわれに教える。

職業の面からの考察とならんで、注目すべきものは、事件の関係者が、関東以西の出身であり、関東以北は一人もいないことである。そして紀州はそうした出身地方のいわば中心であり、当時の社会主義者は、幸徳や堺利彦を別とすれば、大石誠之助に大きな期待と敬意がよせられていたことである。その結果、多くの同志が大石のもとに去来し、幸徳の来訪はもちろん、事件の発端をつくったひとりである新村忠雄もまた、大石家に寄寓するというように、彼の存在は、同志のなかであって、きわめて重要な地位にあったと考えられる。大逆事件の真相を明らかにするために、幸徳とならんで大石誠之助について研究することが必要であるのは、以上のような理由によっている。

浜畑氏は、「大逆事件当時、マルクスの唯物論と、東洋的唯霊論との思想の戦い⁽¹⁾がまだ妥協が出来ぬ裡に事件に捲きこまれてしまった」と言っているが、大石のみならず、この事件に斃れた多くのアナキストの行動には、合理と非合理、近代と前近代との対立・葛藤が、きわめてはっきりとその内面に陰影を投じていることに驚かざるをえない。大石は、どのような思想をもっていたのであろうか。明治41年1月1日、「能本評論」に発表された「国体論」によれば、彼は、天皇制そのものを否定するのではなく、国家共同体の象徴としての天皇制については、認めていたようにも考えられる。しかしその神秘化には反対で、「尤も現今でも頑迷な教育家や固陋な政府者の間には、偶像に対する様な儀式と供物を以て御真影を祭すものもあり、行幸の沿道にある茅屋へ幔幕を閉らして、貧民の状態が天覧に達するを遮る様なものもあるそう」と批判している。ここには、天皇そのものはこれを存置し、むしろ天皇と国民の間の障害となっている華族などを除くことが力説され、宮下太吉や新村忠雄あるいは菅野スガのような天皇抹殺論とは、ややその思想を異にしていたようにも感じられる。しかし同時に、日本の伝統的な家族制度の徹底的な破壊をとらえていたことをみれば、その思想がアナキズムであったことは疑

いえない。思想においてはアナキストであっても、行動はこれにとまわず、また、過激派とは区別されるものをもっていた点では、幸徳とやや立場を同じくしていた。この意味で、大逆事件に連座した24名は、ほぼつぎのような3つのグループに分けられるように思われる。(一)幸徳秋水、森近運平および大石誠之助のように、主義および理論上の指導者として重要な地位を占めていたけれども、権力の象徴ともいべき天皇にたいしては、いわば志士仁人としての心情から、否定しえず、また敢えてそのような行動に出ることのできないインテリゲンチヤ、(二)これに反して、菅野スガ、新村忠雄、宮下太吉、古河力作のように、理論よりも実践が先行し、天皇制打倒を具体的に計画したグループ、そして、(三)以上の2つのグループと何らかの関係をもちながらも、事件そのものには、全く関係のない者、に大別されるであろう。幸徳秋水や大石誠之助のような理論派と、宮下太吉、菅野スガらの行動派との間には、明確な断層がみられたことは明らかであり、大石誠之助の悲劇は、これを認識せず、曖昧のままに行動したことのうちにある。本書はそうした大石の悲劇を、著者は「冗談からコマが出た」という大石自身の言葉によって代表させているが、近代と前近代、合理と非合理の混沌たる世界のなかで、処刑されたことのうちに、その悲劇が最高度にたかまったのだといえよう。このことは、幸徳秋水にとっても例外ではない。理論派とはいっても、家庭をもち、世故たけていたともいべき幸徳・大石および森近に比べると、実力派の行動は、合理的で明快に割りきれぬものでなければならなかった。しかし、それにもかかわらず、宮下太吉、新村忠雄、菅野スガおよび古河力作の思想と行動は、やはり、幾多の矛盾にみち、彼らの生活の内面には、近代性と前近代性の生々しい葛藤をみることが出来る。

(3)

上に述べたように、幸徳、大石および森近等を理論派、宮下、新村、菅野スガおよび古河らを行動派として規定することがゆるされるならば、この2つのグループの間には、天皇制の評価をめぐる微妙なニュアンスの差異が存在したことが指摘されなければなら

注(1) 浜畑栄三「大石誠之助小伝」138頁。

(2) 上掲書、146頁。

(3) 上掲書、150頁。

大逆事件における「近代」と「前近代」

い。

「無政府共産主義というのは、ひとり日本ばかりでなく、欧州では第1にフランス、第2にロシアというように、早晩無政府共産主義の革命が起るべき徴候がある。……私はこの説を信じて、そのことを亀崎地方の人に説いてみたことがあります。すると政府の役人などを攻撃したときには誰もそれはそうだと賛成いたしますが、天皇のことになると、みな我国は他国とその国体を異にするとか、皇統連綿の天皇は神だとか申して、私の言うことに承知いたしません。それで私は、天皇もわれわれと同様に血の出る人間だということを示して迷信を破らなくてはならぬ、天皇を斃さなければならぬと決心致しました⁽⁴⁾」。

以上の陳述が果して宮下が述べたそのままであるかどうかは疑わしい。検事によって被告に不利に改竄されたことも考えられるが、「天皇もわれわれと同様に血の出る人間だということ」という表現はいまもなお、われわれに新鮮な感銘をあたえずにはおかない。なぜなら、大逆事件の企てが、日本の「前近代の打破」を熱狂的に希求する青年たちによるものであったことは明らかである。管野スガも、つぎのように述べている。

「睦仁(明治天皇の名——編者注)という天子は、個人としては歴代の天子のなかでももっとも人望があり、またよい人のように思いますから甚だお気の毒ではありますが、しかしとにかく天子というものは経済上では掠奪者の張本人、政治上では罪惡の根本、思想上では迷信の根源になっておりますから、このような位置にある人は斃す必要があると考えていたのであります⁽⁵⁾」。

ここでもまた、天子は「迷信の根元」としてとらえ、人民の迷夢を醒ますには、天皇個人には気の毒であるが、これを斃す以外にはありえないという意味がこめられている。これは、いわば、近代思想の萌芽であり、前近代的な遺制にたいするはげしい攻撃的言論であるといわなければならない。

宮下太吉とならんで、もっとも過激な実行派ともいべき新村忠雄は、「其方は大石方に滞在中、峰尾、高木、崎久保などに、皇室を尊敬する理由のないこと

を説き、至尊に危害を加える計画があるということ話を話したのか」という検事の問いにたいし、

「私は皇室を尊敬するのは迷信家が神社仏堂を尊敬するのと同じで、その迷信がひろがるに従って、一般人民が迷惑することになるから、その迷信の本源である天子を斃して迷信家の夢をさまし、社会から迷信を追い払わねばならぬと申しました⁽⁶⁾」。

これらの陳述に共通するものは、天皇への民衆の尊崇を迷信としてとらえ、天皇の暗殺は、こうした迷信の打破であることを強調しているのが印象的であり、前近代に挑戦するという点では、いちじるしく啓蒙思想に類似していることがわかる。古河力作にしてもほぼ同様な発想から、行動に入ろうとしていた。

「無政府主義を実行するには、どうしても皇室は邪魔になるという話もあり、しかしまだ時期が早い、いまそのようなことをすればいっそう迫害がひどくなって、かえって主義の実行が困難になるという論もありましたが、やはりどうしても日本人の迷信を醒ますには、元首をやるのが利益になるという結論になったのです⁽⁷⁾(傍点引用者)。

この陳述には、社会主義理論の展開や「人民の解放」というようなスローガンはまったくみられず、ひたすら、魔呪的な存在として人民に君臨する天皇制を、前近代的な遺制の象徴であり、迷信である以上、これを打倒することこそが革命であると考えられているところに、彼らが「近代」と「前近代」との対立を、当時の日本の政治状況に即して把握していたということができる。その意味では、これらの実行派の行動は、一見、明確な理論体系や社会主義思想を欠落させたアナキストのテロリズムにみえるにもかかわらず、その根底には、鋭く「近代と前近代との相剋」が意識され、近代的な啓蒙思想に近いものをもっていたことがうかがわれる。これにたいして、幸徳、大石および森近らの「理論派」の行動は、どのような形をとり、どのような特徴がみられたであろうか。

(4)

「行動派」の思想に、もっとも大きな影響をあたえ

注(4) 宮下太吉、検事聴書(長野地方裁判所検事局)(塩田庄兵衛・渡辺順三編「秘録大逆事件」上巻、春秋社、昭和34年、120頁。

(5) 上掲書、104頁。

(6) 上掲書、205頁。

(7) 上掲書、259頁。

大逆事件における「近代」と「前近代」

た者のうち、内山愚堂の秘密文書、「入獄記念、無政府共産」は、一種の煽動文書であるが、幸徳等の思想は、こうしたものよりもはるかに理論的なものであった。理論派の思想を知る上で、きわめて重要なものは、幸徳秋水の、磯部、花井、今村の3弁護士にあてた陳弁書であろう。注目すべきことは、この文書のなかで、幸徳は、無政府主義と暗殺との関係にふれ、暗殺が無政府主義の手段として絶対規されるといふことの誤りについて説明し、暗殺は、革命に何ら関係のないものであることを強調している。しかし、つぎの一節は、行動派の主張と対照的であるところに、深長な意義をもつ。

「無政府主義者の革命成るのとき、皇室をドウするかの問題が先日も出ましたが、それも我々が指揮、命令すべきことではありません。皇室自ら決すべき問題です。前にも申す如く、無政府主義者は武力、権力に強制されない万人自由の社会の実現を望むのです。その社会成るのとき、何人が皇帝をドウするという権力を持ち、命令を下し得るものがありましょ。他人の自由を害せざる限り皇室は自由に、勝手にその尊榮、幸福を保つ途に出で得るので、何等の束縛を受くべき筈はありませ⁽⁸⁾ん」。

この幸徳の皇室観と、さきに述べた理論派との皇室にたいする見方に、あまりにも大きな距離があるのに驚かされるであろう。そこには多くの理由が考えられるが、まず第1に、幸徳は、いわば志士仁人として、皇室にたいして、一種の特別な感情を抱いていたのかもしれない。そのことが、このような穏かな表現となつてあらわれたのかもしれない。しかし仮にもしそうだとすれば、幸徳の思想は、アナキズムと尊王思想の葛藤に彩られ、きわめて矛盾の多い体系であるといわなければならない。そしてそれはまさに、「近代と前近代」との相剋として理解することもできよう。第2に、幸徳は、当局の心証をよくし、意識的に追求をかわすため、一時的に皇室の地位について、政治的な態度をもって臨んだのだといふこともできるのではなからうか。しかし第3に重要なことは、幸徳は、皇室を、社会主義革命の戦略のなかで考え、暗殺というテロリズムをあまり問題にしていなかったのではないかと考えられる。しかしもしそうだとすれば、彼が宮下、

管野らの企てを一応知っておりながら、何故に制止しなかったのか、この点がわからなくなる。いずれにしても、彼の態度には、明確でないものがみられるのであって、みずから暗殺を企てることはしないけれども、これを暗に支持したような形跡がみられる。「近代と前近代」との相剋が彼の場合にも、窺い知ることができる。

大石誠之助の場合、皇室は、ほとんど問題にならず、理論的には無政府主義を理解していたとしても、これを実践するなどということは、到底考えられないところであった。彼はアナキズムを、自分の生活との関連において逆説的にとらえていた。

「私は社会主義や無政府主義に対し、理想と実行とを全く別々に離して考えて居りました。従つてこれを鼓吹するについても、公開の談話会や演説で述べたり、新聞雑誌へ寄書した外に、かつて実行の方面に手をつけたことはありません。そうしてその主張というものは、遠き遠き将来に起るべき、取り止めもつかぬような理想——寧ろ空想——であつて、今日では自分の一身一家についても決して実行のできることはないのです。それで私は口にこれを唱えながら実行に於ては依然現時の習慣や制度を守つて、少しもこれを破ろうとしたことはありません。自ら今日の医者皆替間のようなつまらぬものだと罵りながら、実際は世俗の医者と同じように病人の欲心を買うことに努めていました。今の家庭は不都合だといひながら、実際に於ては自分の家庭を尊重していました。…その他私有財産制度をけなしながら、自ら多少の貯蓄をしたり、老後の謀や子女の教育ということなどにも、世間並に腐心していましたが、階級制度を非難しつつも、自家の雇人などはやはり階級的に扱うといつて人から非難をうけたこともあります⁽⁹⁾」。

ここには、理論と実践との背離についての心境が見事に且つまた赤裸々に吐露され、読む者にある種の感動をあたえる。大石も、近代に目覚めたすばらしい自我をもちながら、その自我のうちにひそむ前近代性を克服しえなかったのではなからうか。

理論と行動における矛盾は、彼らの私生活において、もっとも鮮明な形であらわれたのである。革命家とて

注(8) 幸徳秋水「陳弁書」前掲書174頁。

(9) 大石誠之助「社会主義と無政府主義について」前掲書、下、184~5頁。

大逆事件における「近代」と「前近代」

人間である。彼らの内面における相剋は、革命の前途にたいする悲観的予測と人間的苦悩とによって一層はげしいものとならざるをえなかった。

長野県明科で、爆弾の実験を試み、その爆薬が発覚したのを契機として、大逆事件がひきおこされたのであるが、宮下太吉は、こうした実験に心をおどらせながらも、大きな悩みを抱いていたと思われる。

明治43年6月28日予審調書には、検事の間をたいして、つぎのようなことが書かれているのが注目をひく。

「5月8日の日記に、『この夜清水氏と話して心解』とあるのはどういうことか。

「それは私の気がとがめたためか、どうも清水が私とたまに関係があることを察しているのではないかと思ひまして、その夜わざわざ清水を犀川橋のところまで連れて行って、世間では君の細君と僕が関係があるように云うけれど、決してそんなことはない、と申しましたところ、清水は俺はそんなことは信じていないから安心せよと申しましたから、「心解す」と書いたの⁽¹⁰⁾です」。

しかし実は、宮下太吉は、壮士俳優、清水の妻たまと通じており、悩んでいた。しかもその煩悶の果てに、秘密の大事を清水にうち明けて、しかも、その爆薬を彼に預けたのであった。この事実について、管野スガは、検事の訊問に、つぎのように答えている。

「宮下が爆薬を清水というものに預けたということ、新村からきいたか。

「ききました。それで私は非常に驚き、ぜひ清水からとりもどすようにと言いました。そのとき私は、新村に、親愛なる幸徳にさえも秘密にしていることを、宮下はなぜ軽率にそんなことをしたのかと云いますと、新村もなるほどそうですねと心配しておりました。そのとき虫が知らせたのか、私は、動悸がしました……」。

新村にききますと、宮下は清水の妻と親密になり、この事件のことをその女にうちあけたということです。宮下は、その女と関係していることを管野に云わないでくれと、新村に云った⁽¹¹⁾そうです」。

ここに、英雄的な気持になり、ひそかに恋愛関係におちいった人妻に、その悲愴な心底を語った宮下の青年らしい心理を読みとることができよう。そして、宮下を軽率であるときびしく非難した当の管野も、荒畑寒村の妻でありながら幸徳秋水と結ばれるという矛盾のなかで苦悩していた。大逆事件における革命家の群像は、運動と理論における「近代と前近代」を強烈に意識しながら、自己の内面に巣喰う矛盾のなかに、やはり、「近代と前近代」の問題を、どれだけ意識したであろうか。

さて以上にみるように、われわれは、大逆事件をもって、たんに「革命家たちの殉難史」あるいは「政治的な陰謀事件」としてのみ理解されるべきではなく、これらの革命家たちが、うちなる「近代と前近代」とのはげしい相剋に苦悩しながら、前近代の象徴としての天皇制に真向から挑戦したものとして理解すべきことを力説した。そのように把握することの意味は、現代史の謎ともいべき大逆事件が、日本における「近代と前近代」の相剋をもっとも痛切に意識していた文人たち、とりわけ、徳富蘆花、夏目漱石、森鷗外、永井荷風および石川啄木に、もっともはげしい衝撃をあたえたことのうちにある。

〈追記〉 田代書店主田代均氏から浜畑氏の「大石誠之助小伝」をいただきながら、数ヶ月がたってしまった。何か意見を書くことを約束しながら、のびのびになってしまったことをお詫びします。

—1973.5.28—

(経済学部教授)

注(10) 上掲「秘録大逆事件」(上) 151頁。

(11) 上掲書、224~225頁。